

「作家」と「火に包まれた足」〈翻訳二篇〉

(カシュニッツ／作家／精神の危機)

マリー・ルイーゼ・カシュニッツ 著

栗花落 和彦* 訳

“Der Schriftsteller” and “Die FüÙe im Feuer”

(Kaschnitz／author／mental crisis)

written by Marie Luise Kaschnitz

translated by Kazuhiko TSUYU*

作 家

1

十四日ほど前私は、あることを止めて別のことをしようと決心した。私の妻に私は自分の計画について何も打ち明けなかったし、彼女もまたそのことについて何も気づかなかった。彼女は思いも掛けず私の仕事部屋に入って来ることがたびたびあり、つい今しがたもまたここにいた。彼女が自分の部屋の戸を開けて廊下を通って行く様子を、私は耳にして、当然のことながら自分なりに様々な心構えをした。私は既に半分書き込みがされている一枚の紙を目の前に置いて、私の妻が部屋に足を踏み入れる瞬間、その綴られた文面に二、三の言葉を付け加えた。私はボールペンを使用しているので、古い筆跡と新しい筆跡の間の相違を確認することなど出来はしない。それ以外に私の妻は私のことをあれこれ詮索することはない。彼女が中に入って来るのはただ、「あんたはエスプレッソ・コーヒーを一杯飲みたいの、それともジュナップスなの」とか、「あんたはもしかして頭が痛くて、何らかの錠剤が要るのかしら」と尋ねるためなのだ。彼女が私の肩に片手を置くと、私は「やあ可愛い子ちゃん」とか「どうかしたのかい」と言う。そして私がこんなことを言う声の調子を聞いて、私の妻は「あたしは邪魔をしているのかしら」とか、「少し休憩することに彼は喜んでいるのかしら」とすぐに悟るのだ。もし私がつい今しがたみたいイライラして返事をする、彼女は即座に退出してくれる。彼女は気分を害しているのではなく、私が——彼女の思うところでは——自分の仕事をこれほど上手く扱らせていることに満足しているの

だ。私が全くもはや仕事をしていないことを、彼女は知らない。

2

少し前私は、「ある作家会議に参加するためなんだ」と称して、数日間旅行に出ていた。私の妻が私にこの会議のことを思い出させてくれ、私の手提げトランクの荷造りをしておいてくれた。彼女自身はこのような機会には留守番しているのが常である。〈いっばしの男には独りでいることが必要なんだわ、少なくとも時には〉という観念が彼女にはある。彼女は恐らくまた、〈彼が自分の仕事仲間達を相手に万が一会話することにでもなれば、あたしは彼の邪魔になるのではないかしら〉と危惧しているのだろう。会議の際にそのような会話になるのは決してないと言ってよいことを、彼女は信じていない。そして私がこの種の旅行から戻って来るたびに、彼女は「この人はどうだったの、あの人はどうだったの」と尋ねては、沢山のことを話してもらいたがるのだ。彼女は私を駅に出迎えに来た昨日もまた、早速尋ね始めた。しかし私が「いつも通りだったよ」としか彼女に答えなかったの、彼女はおとなしくなった。彼女は恐らく、〈彼は長くて暑い旅行で疲れているんだわ、あるいは何らかの理由で気分が悪いんだわ〉と思ったのだろう。彼女が例の力強い早足で私の前を歩いて改札口に向かって行った時、私は初めて、〈彼女に本当のことを言おう、あるいは少なくとも本当のことを一部でも言おう〉と思いついた。「耳を澄ませて聞いておくれ」と私は言った、「僕は会議に出席しなかったし、その気がなかったんだ。僕は途中で下車して、軽便鉄道に乗って先へ行ったんだ、二駅か三駅先へね。僕が列車を降りたそこには、駅と駅の食堂の他には何もなかった。その村は駅から三キロ離れたところであって、僕はその村を一度も目にし

*ドイツ語教室 Department of German

たことがないんだ。僕は駅の食堂に居続けたし、そこでは部屋もひとつあてがってもらった。僕はその日々を食堂で過ごし、ビール・グラスを洗ってきれいにすることに従事したんだ。私はこんなことを話しながら、自分の妻を横合いから見つめた。彼女が怪訝に思うのを、あるいは私に色々な非難を浴びせるのを、私は待ち望んだ。彼女は私の社会的な諸々の責任についてとても喧しいのだ。彼女はしかし私に非難を浴びせることはせず、「食堂のご主人はどんな人だったの。そこでいつものビールを飲んでた人達は何を話していたの」と興味深そうに尋ねた。「亭主というの」と私は言った、「寝坊助だったし、そこの客達を相手に僕は話をしなかった。僕はただグラスを洗っただけなんだ」。私の妻は、私より事情を知っている者のように笑った。どうやら彼女は、〈彼はこの旅行でつぶさに取材調査をしたんだわ〉、あるいは——彼女の呼び方によれば——〈資料収集をしたんだわ〉と確信しているようであった。彼女に説明されねばならないことを、彼女に説明するのは難しいことだろう。

3

私はもう四週間前からはやものを書いた試しがないのだが、それでも相変わらずすることはある。私の短篇小说のうちのどれかひとつを掲載してほしいと言われている精選集が計画されているし、既に請け合った様々な講演が日程に上っている。色々な誰それ氏が自分の古い原稿を送り付けてきて、「これを貴殿に手直しして頂きたい」と言うのだ。それに加えていっばしの作家というのは、もはや若くも無名でもないのなら、無数の手紙に返事を出さねばならないのだ。私はこれら細々とした仕事を全て片付けてしまうと、自分の部屋の中をあちこち歩き始める。私は家を出て様々な新聞を買ったり、通りを歩いたりすることもたびたびある。〈いっばしの作家であれば大抵しかも全く思わず知らずのうちにするのは違って、全てのことに注意を払って全てのことを知識に収める必要がもはやないことは有り難いものだ〉、と私は感じる。世界はいつもの通り現に存在しているが、私は世界を自分の鉤爪でギュッと捉まえる必要はない。年老いて腹の満ち足りた猛禽のように私は世界の上を漂って行き、自分の両翼を動かさないのだ。家に戻ると時折り、私は台所に行って、自分の妻に「昼食の支度を手伝おう」と申し出る。夫どもが一般的に少しも知りたがらない事柄を突然気に掛けると、それは妻達にとって耐え難いものであるということを、私は知っている。私の妻がそのような場合忍耐を失わないことを私は高く評価

している。今日もまた彼女はとても愛想が良くて、私にジャガイモの皮を剥かせてくれ、午後にもまた私と一緒に川辺を散歩してくれて、「どうしてあんたにはこんなことをする暇があるの」とか、「あんたはもしかして自分の仕事が捗っていないのかしら」と尋ねることはなかった。

4

相も変わらずこれほど多く自分の以前の生活、つまりは作家生活に従事せざるを得ないことに、私はとてもうんざりしている。そのため私は、自分が朝に郵便受けから取って来る郵便物の相当な量、とりわけ様々な出版社や放送局や文芸団体からの手紙類を隠し始めた。私は常日頃自分の妻に自分の様々な返事をタイプライターで口述筆記させているので、彼女には「何も来なかったよ」とか、「殆ど何も来なかったよ」と言っている。そしてこのことは、「今は夏という季節だから」ということで、ある程度は正当化することが出来る。それらの手紙を引き裂くなんてことは私は敢えてしない。私は手紙類を自分の書き物机の中に積み重ねているが、私とその机の鍵を掛けたままにしているのは生まれて今初めてのことだ。郵便物に返事を出さないことで得ている暇を、私は自分の将来に取り組むことに使っている。私はいつもの新聞を読んでいる。そしてとりわけ丹念に読んでいるのは、求人案内が出ている例の紙面だ。そこには私を魅了する仕事がたくさん出ている、いやそれどころか時には、〈俺ならこれができる、あるいはあれをすることが出来るのだ〉という思いがまさしく陶酔のように私に襲い掛かってくる。私には選択する余地がある。新たな青春みたいなものが私にとって始まるのだ。もちろん私は自分の妻に、職業を替える自分の目論見について何も言わない。彼女にはじっくりとその覚悟をさせねばならない。差し当り彼女が信じているのは、私がある危機——これを彼女なら恐らく《創作の危機 Schaffenskrise》と呼ぶところだろう——の状態にある、ということだ。彼女は私を病人みたいに取り扱っているが、その際皮肉にも彼女を当惑させていると思われるのは、私がこのように上機嫌であるということなのだ。

5

ゲルダ——これが私の妻の名前である——は私に今日の午前、新聞の切り抜きで一杯の大きな封筒をひとつ持ってきた。彼女はこれら新聞の切り抜きを私の書き物机一面に振るい出して、おまけに子供みたいに

笑った。「私がこれを」と彼女は言った、「集めたのは、あなたのためのよ。中には犯罪事件もあるわ。でもそんなのばかりじゃなく、人間に起こりがちな悲劇的な事件もあるわ。もしかしたらあなたはそのうちのどれかを利用することが出来るでしょう。多くの作家は、それも最低の作家でなければ、自分の扱う素材を日刊新聞から取り出してきたのよ」。私が礼を言うと、彼女は元通り出て行った。彼女は恐らく、〈彼はとても貪欲に殺人事件や人間に起こりがちな悲劇的事件に飛びつくだろう〉と思ったのだろう。私はしかし全てをさっさと片付けてしまい、自分の妻を失望させるのは気の毒ではあったけれど、晩にはもはや彼女が集めてくれたものに話を戻すこともなかった。ゲルダは私のために何らかの素材を調達してくれる彼女なりの親切な骨折りをその後も決して放棄することはなかった。午後になってもなお彼女は何の遠慮会釈もなく私の部屋に飛び込んできた。私は大学生の頃に習得したけれど、とうの昔に元通り忘れてしまった速記の練習をしようとしているところだった。私の妻は私が行き先でいるものに注意を払わなかった。「下に」と彼女は興奮して言った、「ねえ、あの小さな広場におじいさんがひとり座っていて、時折り片手で頭の上の空を掴むの。まるでそこを飛びすがる一羽の鳥か蝶を捉まえようとする風なのよ。他にふたりの男がベンチに腰掛けているわ。いつものパンを平らげている労働者ね。おじいさんは男達に何ごとかを話そうとするんだけど、男達は耳を貸さないの」。私は白紙を二、三枚自分で速記した試し書きの上一面に覆って立ち上がった。どうやら、〈あなた、階下に降りて行って、頭の上の空を掴んでそこにはいない鳥達を捉まえようとしているおじいさんと話をしよ、〉ということらしかった。もちろん私はゲルダの気に入るようにしたが、階段のところまで手間取った。そして私が階下に来た時には、ほっとしたことに、その男はもはやいなかった。ゲルダは、私が老人にもはや出くわさなかったことを知った時、泣き出さんばかりだった。どうやら彼女は私のことをひどく心配し始めているようだ。

6

私が今日自分の義兄を訪問したのは、彼と職業上の私の計画について話し合うためだった。私の義兄はある著名な工業会社の経営陣の一員であり、文学のことも何も理解していないし、読書する暇がないことは別にしても恐らく文学が大して好きでもない不言実行の人である。私の義兄は私の訪問を喜んだと見えて、「お立寄り下さったご用の向きは何でございますか

か」とか何とかそのようなことを言ったが、この文句を彼は恐らくそれどころか本気で言ったのだろう。私に有名になって以来、私の義兄は私と親戚であることを誇りに思わんばかりである。彼は私に葉巻を一本と来客用の椅子を勧めてくれ、自分用の書き物机の後ろに腰を下ろし、期待に満ちて私の顔を見つめた。「私は出来ますことなら」と私は可能な限りあっさりと言った、「自分の職業を替えたいのですが。私が参りましたのは、お宅の企業で私の使い道がありますかどうか、お宅にお尋ねするためなのです」。私より何歳か年長でかなり太っている私の義兄は、まるで私がいかがわしい意見を述べたかのように赤面した。「これはやはり君の本音ではあるまい」と彼が言ったのは、恐らく時間稼ぎのためであろう。彼はしかし既に腹を立てており、すぐに叱り始めもした、あるいは私の父の常日頃の言い方に倣えば、私にレヴィ記を読んで聞かせること、つまりたっぷりお説教することを始めたのだ。「君ほど発行部数のある人が」と彼は言った、「君ほど優れた批判力を持った人が。こんなことはやはり狂気の沙汰だし、芸術家の気紛れだよ。もし私達が何かあることに腹を立てたというそれだけの理由で、敢えてこんなことをすることになれば、私達はどうなることやら。物乞いの杖に縋るように零落れるのだ。そもそも私は、『ものを書くことは決して一介の職業ではなく、一塵の天職である』と常に言われるのを耳にしたことがある。ものを書くということはそんなに大したものではないようだね」。その時ふと漏れた言葉を私は嬉しく思った。「天職を授かっているですって」と私は素早く言った、「ええ、ひょっとしたらそうかも知れませんが、やはりいつまでもというわけではありません。もしかしたらほんの一時期の間かも知れませんが、その後になれば元通り見捨てられてしまうかも知れません。但し、失業保険というものがこの種の仕事にはないのです」。私は自分の些か改まった口調の報告を冗談で締め括ったけれど、私の義兄はにこりともせず、信用出来ないという風に私を見つめた。彼は恐らく今ようやく、私が自分のことを彼に説明した文がふたつの部分から成り立っており、そのふたつ目が質問文であったことを思い出したのだろう。「そんなことは君の頭から叩き出すんだな」と彼は言った、「君はうちの一番若い見習いほどにも仕事は出来まい。とはいえ、こんなことはまだ大事なことにすら入らないのだが」。そして「大事なことで何ですか」と私は尋ねたが、この瞬間に女性秘書が中に入って来た。ひょっとしたら私の義兄が私を厄介払いするために、自分の書き物机に取り付けられた呼び鈴ボタンのひとつを押

したのかも知れない。私の義兄は返答をせず、手紙類に署名し始めた。「私の妻には私達の相談について何も言わないで下さい」と私は彼にもはや頼むことしか出来なかった。尤もこんな頼み事は秘書を目の前にして私にはとても言い難いことではあったが。「わかった、可哀想なゲルダ」と私の義兄は言って、私の手を握り締めた。彼はまるで私の妻に私の死去のお悔やみを述べるかのように顔を顰めたが、その顔つきを見て私は玄関の間で笑わざるを得なかった。ある意味ではしかし彼の言い分は正しくさえあった。そしてそもそも彼は愚かな人間ではないのだ。

7

今日私の出入りの出版者が私に電話を寄越したのは、私の新しい小説の表題を聞くためだった。「この本についてはまだただの一行も書かれていないし、ただの一行もこの先書かれることはないだろう」と私は彼に言うことも出来たところではある。私の妻がしかし近くにいたのだ。彼女がしかも私のすぐ横に立っていたのは、私に今しがたうちの息子の手紙を読んでくれたからだった。私はもう長い間、くもはやものを書かない俺の決意をどんな風に彼女に打ち明けたらよいものか。決して彼女にはこのことを全くの偶然によって知らせてはならないとつくづく考えていた。私はそのため私の出版者にこう言った、「表題のことなど私にはまだ分からないし、どうして一体分かるって言うんだい。だってこんなものは全くどうだっていいんだし、本来表題なんてものは、本全体を完成させて目の前に置いて初めて思い浮べることが出来るんだから」。私の出版者はこう反論した、「私は見本刷りをひとつある有力な日刊新聞に載せようと骨を折る心積もりなんです。そのためには何らかの表題が必要なんです。それはほんの差し当たりの表題、いわゆる仮題で構わないのですが」。結局私はちょうど頭に思い浮かんだ言葉、つまり「まあいいさ Nebbich」という言葉を彼に言った。これは悪い事態に対して用いられるユダヤ訛りの言葉であり、軽蔑を含んだ言葉である。「そんなものはもうありますよ」と私の出版者は腹立ち紛れに言った。私達はなおしばらくあれこれ言い合った。そして結局のところ私は、「私がこれと思う表題を文面であるいは電報でも伝えよう」と約束した。受話器を置いてしまうと、私は休暇用施設から送られてきた息子の手紙をちょうど手に持っていた自分の妻に、うちの息子が低学年の頃自分の父親の職業を正確に、つまり作家という言葉で届け出ることを恥ずかしがっていた様子を思い出させた。「あいつがその代わりに

何と書き込んだか、お前はまだ覚えているかい」と私は言って笑い出した、「ビール運びだった。これは遅い馬達を操る遅い男達のことだから、その気持ちは十分に理解出来るよ」。私の妻も笑ったが、古い話を思い出させられるのは彼女にはあまり快いものではないことに私は気づいた。「そのくせ」と彼女は言った、「うちの息子はあんたのことをとても誇りに思っているわ」。それから彼女は私に手紙の結びのところを読んで聞かせてくれたが、その中で坊主は事実《パバの新しい本》のことを問い合わせ、「パバは今度の本はどのくらい捗っているの」と尋ねていた。

8

ちょうど独りで住居にいた時、私は自分の義兄に電話を掛けた。あの時故意にしる偶然にしるもはや話題に上らなかった例の大事なことという言葉で彼が言おうとしたことが、やはり私の興味を惹いたからであった。ひょっとすると彼もまたあの時の私達の相談の結末については不満足だったのかも知れない。——いづれにせよ彼は私が電話したことを喜んでいるようだった。「私が大事なことという言葉で言おうとしたことだって」と彼は上機嫌で言った、「これは何と言ってもやはり明白だよ。君をどこかの部署に組み入れるなんてことは出来ない、ということだよ。君は有名過ぎる。君が関わり合う部下達は遠慮しないわけには行かないところだ。彼等には君の声をラジオ放送で耳にした経験や、君の写真を新聞という新聞で目にした経験がたびたびあり過ぎる。彼等は遠慮して、自分達の仕事みたいな月並みなことについて君と話し合うことはしないだろう。〈彼がうちで働いているという珍事の謎を解いてやろう〉と彼等は頭を捻るだろうし、〈俺達が彼にしてやる様々な報告を彼は作家として利用したがつているのだ〉と思うのが関の山だろう。彼等はしかしまた〈彼の頭には今のところ何も思い浮かばないのだ〉と思いかねないところだし、そうなると〈あの上司は金銭的に援助して彼にこの時期を切り抜けさせるどころか、作家にこれほど相応しくない仕事を彼にさせているのだ〉ということで、私のことをとても悪く取るだろう」。「こいつはあり得ますね」と私は言った。「そうではないかね」と私の義兄は言って私の同意を喜んだ。それから彼は自分なりの言い方によれば、「自制心を持ち給え」と私に要求した、「人は自分が学んで精通していることをしなければならぬんだ。私自身もまた、ある日突然仕事場に行かなくなって小説を書くなんて考えは起こさないよ。それはそうと君は恐らく旅行することが出来るのだろうね、ゲルダと

一緒にかあるいは独りでも。旅行者の流れがまだ溢れ込んでいない国々が相変わらずあるよ。私は君宛てに世界の中のこれらの地域について案内書を幾つか送りたいと思っている。」「新たな感銘だよ」と彼は言った、「これを君はどう思う」。彼が私のことを理解した試しがなく、これからも決して理解することはないだろうということを彼に気づかせるのは私には不愉快なので、私は礼を言った。「ゲルダは何も知らないのです」と私は更に付け加えて念を押した。「そしてまた何も知らせないようにしてもらいたいものだ」と私の義兄は言って、まるで私達が今やある秘密を、いかがわしい類の男性固有の秘密を共有しているかのように笑った。彼がいつの日にか、ひょっとしたら私の息子の結婚式のテーブル・スピーチで、「私どもはふたりとも」とか、「もしも父君があの時居なくなっておりましたら」とか、「父君が危うく羽目をはずそうとするのをこの私が引き止めたのだと、皆様お考え下さい」とか言って、この秘密を仄めかすであろう様子を、私は十分に想像することが出来た。

9

〈彼の気分を紛らわせることが必要だわ〉とどうやら思っている私の妻の願いに応じて、私達は幾人かの人々を招待した。私の妻がひとりひとりの来客名簿を作るために、私と向かい合って座った時すぐに、「作家は駄目だよ」と私は言った。私の妻はそのことを怪訝に思わなかった。私が仲間達とだけ集るのが好きなこと、しかも、「君はこれをどういう風にするんだ」とか「君はあれをどういう風にするんだ」という問いを私達が邪魔されずに問い掛け合うことの出来る居酒屋で集うことが一番好きなことを、彼女は知っている。そういうわけでゲルダはすぐに首を横に振って、私が大部分知らない一連の名前を私に読んで聞かせたのだ。「あんたは新しい人達と知り合わなくてはならないのよ」と彼女は断固として言った、「私に任せておいて。あんたのところを招待されるのは、どんな人にとっても名誉なことなのよ」。〈誰のところかだ〉と私は思った、〈俺がかつてはそうであり、今ではもはやそうでありたくはない者のところか〉。そして私の妻に彼女の計画を思い止まらせようとした——が無駄であった。今晚その客達がやって来た時、ゲルダが言った《新しい人達 neue Leute》というのはとりわけ女性達、もっと正確に言えば美しくて若い女の子達であったことが分かった。彼女は私をこの可愛い連中に次々と紹介して、〈彼はどの子を感じ入って見つめるかしら。どの子が彼を魅了して冗談を言わせるのかしら。

そしてどの子が彼を無関心のままにさせておくかしら〉と細心の注意を払った。〈いっばしの嫁探しだな〉と私は思っただけ気分になった、〈恐らく別の事情であれば、俺の妻のこの実にいじらしい企ては俺を喜ばせもしたところだ〉。しかし今晚のところ私は表面上は上機嫌で、ある時はこちらある時はあちらと女の子達の間を腰掛けて、彼女達にかなり下品な話をしていううちに、再三再四《若き血潮 junges Blut》というあの古めかしい言葉が私の頭に思い浮かんだ。若き血潮があれば人は古くて腐敗した血を甦らせることが出来る。そして生き身のまま朽ち果てて行く老王達の閨の中に薔薇色の少女の肉体が入れられたこともある。ゲルダが私の弛緩した——と彼女は恐らく推測しているだろう——仕事上の力をこんな風にして活性化したがるのは、私の気持ちを傷つけるものだ。私とこの女の子達のひとりの仲を取り持つのが、彼女には辛いものとなることは、私にも分かっている。彼女は私のことがひどく心配であるに違いない。

10

私はこの数日間暇ではなかった。私は三人の雇い主に面接を受け、更に三人の雇い主に書面で応募した。私自らが出向いて行ったお偉方のうち、ふたりは「何ですと、作家なんてとんでもない」と言ったが、それに続いてすぐに、「お宅を約三ヶ月の間ある部署から別の部署へ回すことによって、うちの事業内容をひとつひとつ覗かせてあげましょう」と約束してくれた。「私どもがしなければならないのはただ」とこの雇い主達は私に目配せしながら言った、「体面を守ることなんです。お宅にも一度は一緒に手を貸してもらわねばなりません。さもないとうちの者達は不信を抱きますから。お分かりですね」。私は「分かります」と言って暇を告げた。三人目の雇い主は私のことを知らなかったが、ひょっとして仕立ての良い私の背広のせいであろうか、あるいはまたかなり多くの人に思い通りのような印象を与える私の控え目さのせいであろうか、すぐに不機嫌になった。彼は推薦状を幾つか要求したが、それはもちろん私が彼に提出することの出来ないものだった。「私はこれまでものを書いておりました」と私が言うと、彼は「どちらの新聞にですか」と知りたがった。私は名前を挙げなかった。すると彼は即座に不信を抱いて、政治上の胡散臭さを嗅ぎつけ、そっけなく私を立ち去らせた。労働力が今日不足している時に驚くべきことだが、私が出した就職申込書のうち二通は全く返事が返って来なかった。私はもちろんありのままに、「小生はこれまで芸術活動を行なっており

ました」と書いておいた。私がもらった唯一の回答文は事実またそのことを引き合いに出していた。「貴殿は」と、その他の点では丁重さを崩さないこの書面には書かれてあった、「貴殿のご経歴では現代のこの苛酷な生存競争の内情はお分かりにならないでしょう。従って私どもは貴殿の尊いご協力を断念せざるを得ないのです」。《経歴 Vorleben》という言葉、それにまた商売上の文体が私を明るい気分にくれたが、こんなやり方では先に進まないだろうということも私は見て取った。そのため私は遙かに単純で自分の筋力だけに頼る仕事を考慮に入れて、近頃ボディ・ビルディングと呼ばれているものをやり始めた。独り自室にいる時、私は身を屈めて、重く積み重ねた本の山を机の上に挙げる練習を十回か二〇回繰り返している。この滑稽な運動をちょうど終えて鏡の中を見た時、私は驚いた。汗の滴る私の顔は灰色で、私の両目の中の白いところは細かくひび割れているようであり、出血した毛細血管が混ざっていたのだ。

11

私が少し前まで書いていた限りの本の中では非現実なことがあのように広い空間を占めているとはいえ、私は現実離れした人間ではない。今のところ私は来年以降に向けて財政計画みたいなものを立てるのに忙しいが、その場合もちろん問題なのは、私のことではなく私の妻とうちの息子のことなのだ。私の妻が生活を切り詰めて、少なくとも今よりも小さな住居にそしてもっと物価の安い地域に引っ越すことが、不当な要求であると私は思わない。もちろん私独りではなくある専門家の助けを借りて作成している自分の税金申告書に基づいて、どのくらいの収入を向こう五年間になお見込むことが出来るのか、私は査定することが出来る。その場合もちろん考慮に入れなければならないのは、書物が《捌ける gehen》と言われている年数は以前よりも遙かに少ないということであり、なるほど著者の死は売れ行きを一時的には活気づけるかも知れないが、著者が何も書かないで沈黙したり文壇から姿を消してしまうときとそれは反対の現象を引き起こすということである。私達が銀行に預けてある僅かばかりの金にももちろん手を付けてはならないのは、私が様々な素晴らしい刻印に対する純粋な喜びから投資した古代南部イタリアの金貨のささやかな収集と全く同様である。「年を取ることは高いものにつく」と私はいつも耳にしているし、この老後のために私の妻には万一の場合に備えた貯金を持たせてやりたい。うちの息子の教育費もまたこの蓄えで賄ってやりたい。私は自分

の妻に然るべき時になれば一切のことを明らかにするつもりだ。

12

私が今日報告しなければならないのは、もちろん既に克服した逆戻り現象についてである。ある顔馴染みの女流詩人のある小さな詩を私が読んだのは、その気があってというよりはむしろ偶然にであったが、この詩にはくおしまい Schluß」という表題が付いている。恐らく私がその詩句を読む気になったのは、とりわけこの表題だけのせいであったのだろう。この詩の中で誰かが誰かに、恐らくは作者が自分自身に要求しているのは、自己の《詩を自分の喉の中に押し込めよ》、それゆえ沈黙せよということことであり、しかもそれは、現実が起こっていること、つまり人間が時間という歯車の中で粉々に摺り潰される事態にもっと良く耳を傾けんがためなのだ。この詩句は私の天の邪鬼を呼び覚ました。二、三頁に私が書きつけたのは、私が沈黙すれば耳にするであろうもの、あるいは私が既に耳にしているもの、つまり全て文学とは全く何の関係もないけれど、無力な砂粒のギンギン軋む音とは全く異なる声の全合唱だった。私はこれらの頁を即座に引き千切ってしまった。私がこの挿話を報告するのはただ、生涯を掛けて行なわれる手仕事かどれほど易々とひとりの人間を再び意のままにするものなのかを示すためなのである。

13

私は今日通りでうちの共同住宅のある住人と出会う、家路の最後の道程を彼と一緒に後にした。同じ住人ということ以外殆ど私の知らないこの男は、様々な市立病院を管理する部門の職員である。彼は私に、「これらの病院のある部門全体が最近看護職員不足のために閉鎖される羽目になったのです」と話してくれた。この職員不足について彼はなお長々と述べながら、「男性看護人の需要とりわけ精神病院向けの男性看護人の需要もまたもはや応じ切れないのです」と言及した。私は耳をそばだてて、男性職員がこの病院で雇用され得る様々な条件を尋ねたが、自分の関心をあまり露骨に示すことはしなかった。私が知ったのは、精神病治療の現代的な方法の下では是非ともヘラクレスのような体力を持つ看護人だけでなく、知力と感情移入の能力を持つ看護人もまた求められているということであった。そうこうするうちに私達は自分達の共同住宅の玄関に着いていた。私が別れを告げて心から礼を言うと、彼は私を怪訝そうに見つめた。食事の時私は押

し黙ってぼんやりしていた。〈看護人の職を引き受けた場合、俺はきっと別の名前を付けられることだろう。そうなれば俺はまさしく修道院に入る人のように、世の中のために死んでしまったことになる〉と私は考えた。〈看護人のフ란ツとか、ブラザー・フ란ツとか、彼は誰かに似ているんじゃないか、といった具合だが、こんなことを言い張ることの出来る者達は狂人であり、最初から信じるに値しないのだ。看護人のフ란ツとか、ブラザー・フ란ツとかと呼ばれて、修道院にいるみたいに自分のする仕事を割り当てられ、自分の着る衣服の寸法を取られ、自分の食べる食事を配られるのだ〉。ゲルダは食後家を空けようとしないので、私自身が外出して、とある電話ボックスからその病院と話をし、うちの共同住宅の住人から聞いた全てのことを確認してもらった。「明日か明後日こちらで面接を受けてもらいたい、事情によっては早速病院に残ってもらいたい」と私は言われた。電話ボックスを出る時、私はとても強い動悸がしたので、こんなに興奮した状態でゲルダの目の前に姿を見せないためには、まずは長い散歩をしなければならなかった。

14

市の文化活動に旺盛な関心を持っている私の妻は今日の午前、本日開催される外国人俳優達の客演を私に思い出させてくれた。その俳優達は、大いに取り沙汰されてはいるが私達のまだ知らない戯曲に登場するということだった。晩になって彼女はどんな芝居見物の前にも自分を充たしてくれる無邪気な喜びに包まれて着替えをする間、「うちの息子が自分の休暇を過ごしている小さな海水浴場に二、三日の予定で旅行するつもりなの」と言った。「あんたが必ずしも大忙しというわけでなければ、一緒に来て」と彼女は私を誘った。彼女がこう言う間、私達は並んで寝室の鏡の前に立って、私は自分のネクタイを結び、彼女は自分のネックレスを首に巻きつけていたが、そうしながらも注意深く私の顔を見つめていた。「僕はとても忙しいんだ」と私は素早く言ったが、彼女が私の言葉を信じていないことに気づき、彼女がそのくせ満面の持ちちであることには驚くばかりだった。彼女の微笑は——まもなく明らかになったことだが——間違いなく効く新薬を既にポケットの中に持ってあげているというただそれだけの理由で、自分の親しい病人の悪い病状について気を揉まない人間が浮かべる微笑であった。私の病気は——私の妻の意見によれば——着想の欠如であり、ひょっとしたらまた、常に同じ文体で書き続けることへの嫌気であり、新しい表現形式を見出せない

ことなのかも知れない、というものだった。彼女の治療薬は芝居であり、他ならぬこの上演、他ならぬこの戯曲だった。「あんたには舞台向けに書いてもらいたい」とゲルダはいつも願っていた、と言っておく必要がひょっとしたらあるかも知れない。鎖状に並んだ俳優達の列から垂れ幕の隙間を通して引っ張り出され、割れんばかりの拍手喝采に包まれて私がぎこちなくお辞儀をする姿をいつの日にか味わうのが、彼女の素朴な夢のひとつなのだ。——この夢に彼女は今晚もまた再び耽っていた。上演の間彼女が私を横合いから観察している様子には私は気づいて感動を覚えないでもなかった。その際、その戯曲が何らかの役に立つのかそれとも何の役にも立たないのかは、彼女には恐らく全くどうでもよいことだったのだろう。私に刺激を与えたい、ということなのだ。人が善から悪から同じように刺激を受ける可能性があることは確かに知られてはいるが、私は刺激を受けなかった。戯曲は私を退屈させたし、〈芝居の脚色全体が馬鹿げている〉と私は思った。長い間原生林の中で暮らしたことのある人や、直接戦線から首都劇場にやって来る人にはそう見えるに違いないという風なのだ。私達はその後更に友人達と出掛けなければならず、芝居が跳ねてからもこんな風に付き合わされるのは私には全くうんざりだった。こういったこと全てのせいでも遅くなったので、私達が全く会話などせず就寝したのを、私はただただ喜んだ。

15

〈どうして俺はゲルダにもう長い間本当のことをずばり打ち明けなかったのか〉と私は自問している。この手記の読者の方々もまた——そんな方々がおられるとしたら話であるが——このことを不思議に思われることであろう、いやそれどころか立腹されることであろう。「とどのつまり」と読者の方々には恐らく言われることであろう、「このゲルダは何と言ってもやはり相当分別のある女だし、彼は率直に彼女と話し合う勇気がなく、全くの恐妻家だ。そしてこんな奴がいっぱしの芸術家だと、あるいは少なくともかつてはそうだったと主張しているのだ」。ひょっとするとこの読者の方々はこちら推測されるかも知れない、「彼は自分のことに自信がないために、そのことについて話そうとしないのは、禁煙するという自分の決意を公言したがる人と同じようなものだ」。しかしこれらの推測は事実合っていない。いっばしの作家は大抵かなり孤独なものであり、その妻は彼にとって世界と繋がりを持ったものである。妻はそれなりの様々な要

求や仮借のなさや恐ろしいまでの信頼を示す世界なのだ。自分がまだ妻に惚れ込んでいようと、とうの昔にもはや惚れ込んでいなかろうと、このことは何ひとつ変わらない。私は自分のことに自信があるし、ゲルダとの対決を回避するつもりはない。それにもかかわらず、彼女がどんな言葉も交えず私のことを理解してくれるようになれば、その方が私には有難いのだが。

16

今晚——ゲルダが海辺へ旅立つ前の晩のことである——私が先ず自室で次いでヴェランダで腰を下ろしたのは、とても暑くて到底涼しくなりそうもなかったからである。私は隣近所の庭の木々の黒い梢をじっと見つめながら、〈どんな類の生活を俺は精神病院で送るのだろうか〉と心に思い描いた。私は落ち着いて晴れやかな気分だった。私の妻が寝室で自分の所持品を荷造りする様子を私は耳にして、〈俺は彼女と先ずは会うところではないだろうし、その後は日曜日だけ会うことだろう〉と考えた。——これは、私が自分の自由のために支払わなければならない代償であり、私にお釣りは要らなかった。そして私はそのことに苦しまなかった。私は海水浴場にいる彼女に手紙は書くが、差し当り住所を知らせるつもりはなく、彼女には〈彼も旅行中なんだわ〉と思わせておきたかった。〈彼女は警察を動かすことはないだろう〉と私は全く確信していた。〈俺の隠れ家は充分選り抜かれたものなんだ〉と私には思えた、〈俺をここで捜す者などいないだろう〉。そしてゲルダが精神病院に足を踏み入れるなんてことはよもやありはしなかった。その時突然私は、〈こいつは全くうまくない〉と気づいた。ゲルダには、軽い鬱病に罹っていてまさしくこの病院で時折り睡眠療法を受けている女友達がひとりいたのだ。

早くも私は、自分がゲルダとそこの庭で出喰わす様子を思い浮べた。〈俺はひとりの病気の男、つまり奇妙な跳ね方をする痙攣性脳麻痺患者を案内している。その病人を腕から離さないために、俺も彼と同じ跳ね方をする。俺と同様病人も白衣を着ているので、栗の木の下に立って俺達の方を見やっているゲルダは、誰が看護する側で誰が看護される側なのか見分けることが出来ない。びっくりして彼女は自分の両手を顔の前で打ち合せる。俺が自分の担当する病人と一緒に角を回って姿を消す間、彼女は相変わらず、半ば落葉した木々の下で、俺が最後にもらった文学賞の賞金から彼女に贈った可愛い外套に包まれて、だが寒々と全く独りぼっちで立ち尽くしている〉。この姿を私は相変わらず目の前にしている。稲妻が光るたびにその姿が

たしても浮かび上がって、私は悲惨な気持ちができるのだ。

17

今しがた、つまり真夜中直前ゲルダは、「近付いてくる雷雨が怖いから」と称して、ヴェランダにやって来た。彼女は私の傍らに腰を下ろして、自分の片手を私の片手に重ねた。彼女は私に先ず、冷蔵庫の中に私のために用意した限りのものを伝え、それから冗談交じりにこう尋ねた、「あんたは私が居ない間に、うちの集いに集められた可愛い女の子達のひとりと会う約束をするつもりはあるの。そしてあんたが執筆しなければならぬ戯曲について劇場の総監督と話し合うつもりはあるの」。その時突然彼女は話を中断して、「あんたがもはやものを書きたくないと思っているのは、私には分かっているわ。白状なさい」と言った。私は考えた、〈一体どこから彼女はこのことを知ったのか、俺の義兄からか。それともそのことは既に新聞に出ているのか〉。私はしかし彼女がこんなに落ち着いてくれてとても幸せだった。これからはもはや秘密は何ひとつ要らないし、私は彼女の居ない間に住居から逃げ出す必要がなかった。「僕は嬉しいよ」と私は言った、「お前が事情をその通り受け止めてくれて。僕はお前に感謝している」。そして実際私の両の目には涙が浮かんだ。「そうじゃないこと」とゲルダは言った、「私はあんたのことを理解しているわ。でもこれでおしまいってわけじゃないわ。あんたは今に分かるでしょう」。「一体まだ何があるっていうんだい」と私は不安を覚えて言った。しかしその時彼女は既に立ち上がって、秘密を漏らすなと言われていたのに結局は漏らしてしまう子供みたいに、私にもはや目配せするだけだった。

18

ヴェランダで私達が少し話し合った後、ゲルダは就寝した。彼女はいつもの習慣通り戸口という戸口を開けっ放しにしておいた。そこを通して一陣の強い隙間風が起こって、私が書き物机の上で整理した書類が全て床の上に、それどころかヴェランダにいる私のところにまで吹き寄せられた。既に雨が降っていて、私は立ち上がって書類を拾い集めた方がよかったのだが、とりあえずそんなことはしなかった。そうするどころか私はヴェランダに座ったまま、〈もはやものを書きたくない男の話を俺が書くとしたら、どんな風だろう〉とつくづく考えた。〈この男をある特定の誰それ氏としたいが、同時にまた人間一般ともしたい。芸術がも

はや本質をなすものではなく、本質をなすものをもはや表現することの出来ない時代に生きる人間なのだ。その男を怠惰な人物にしたいし、様々な失望を味わわせたくもない。彼にはもはや使命がないのだとひたすら思い込ませ、全く単純な別の仕事を見つける努力をさせよう。このような本を書くという思いが私を大いに刺激した。「まだ全てがおしまいでわけじゃないわ」と私の妻が言った時、その言葉で彼女が何を言わんとしたのか、ひょっとしたら私には今や分かる思いがしたのかも知れない。いずれにせよ私は、干上がっていた庭という庭に早くも雨が滝のように降ってくる間、自分の財政計画と、ゲルダに与えようと決めた他の全ての書類を戸棚の中に仕舞い込んで、積み重ねた白紙の山を自分の書き物机の上に置いた。私は電話帳から精神病院の番号を書き出し、朝になったら向こうに電話して「私はお伺いするつもりはありません、まだそのつもりはないのです」と言うつもりだった。私はしかし腰を下ろしてもすぐには書けなかった。それどころか私は突然狂人みたいに笑い出し、狂人みたいに両の拳で書き物机の上を叩いたのだ。

もちろん私の妻はその物音ですぐに目を覚ました。彼女は全く寝呆けたまま突然戸口の内側に立って、「列車に乗るために私はもう起きなくちゃならないの」と尋ねた。「いや、いや」と私は言った、「さあ眠り直しなさい。僕がお前をきつと起こしてあげるから」。彼女は行ってしまい、〈彼女は喜ぶことだろう〉と私は考えた。とはいうものの、〈彼女は結局全てのことと折り合いをつけたのだ〉と私は確信していた。彼女は遅いし、作家としての私がいなくても生きることが出来る、それどころかそもそも作家や画家や作曲家なんかはもはや存在しなくても、彼女は生きることが出来るのだ。しかし事態はまだそんなところまで至っていないし、ひょっとすると決してそんなところまで至ることはないのかも知れない。

火に包まれた足

9月3日 私の目下の身体の状態を病気と呼ぶとすれば、それはきつと間違っているところだ。私は病気ではない。大袈裟に言うことなく、〈あたしはこの数日間ほど身体の調子が良いと感じたことは一度もない〉と私は主張することが出来る。私の身体の調子は良さそうに見えるし、私の顔は以前は晩遅くになるとひどくやつれていたけれど、今ではどんなお化粧の助けを借りなくとも真夜中まで薔薇色で瑞々しい。仕事をこなす私の力もまた決して衰えた試しはない。六時を告げる時計の音がすると、「えっ、もう仕事はお仕舞いな」と私は言う。——事務所内の私の同僚達はその間にもう何度も欠伸をしては時計の文字盤を見つめていた。私の食欲は旺盛であり、胃もたれすることなく、どんなに消化の悪い食べ物でも私は食べることが出来る。そして私が以前たびたび苦しんだことのある喉の痛みはもう数ヵ月前からはや問題ではないのだ。私はもはや若くはないけれど、抜群に健脚でもある。この間初めて私は四時間の散歩をしたけれど、翌日になって筋肉痛に苦しむことはなかった。私がしばらく前から自分の両腕と両脚のところにあるのに気づいている青い痣は何でもないはずだ。

9月5日 今日私の行きつけの美容師が私にこれらの痣のひとつを気づかせてくれた。私は彼に新しい髪型を説明しようとしているところだった。その際私が自分の両手を頭の上方に挙げたので、私のもともと長くはないブラウスの両袖が両肘の上方にずり戻ったのだ。「こいつはでもとても痛かったに違いありません」と美容師は言った。そして鏡に映った彼が私の剃き出しの右腕を指差している様子を私が目にすると、その腕には茄子に似た大きな青黒い痣がひとつ見えていた。これを目にしても私はびっくりしなかったし、自分の皮膚のこのような変色にはもう慣れっこである。だから、「お客様は転ばれたんですか」という美容師の質問に対して、「あたしは本当のところに見合ったことを何も思い出すことが出来ないの」と自分がどうして答えなかったのか、私には分からないのだ。それどころか私は慌てて、「そうですとも、転んだのよ」と言っただけで、捏ち上げた転倒を事細かに説明したけれど、そのことには全く何の理由もなかった。人が何らかの負傷や打撲や衝突のことを一時的に元通り忘れるのは、何と言っても時には起こるものだ。私の話は事実またかなり不自然に聞こえたに違いない。いずれにせよ鏡に映ったアルフォンス氏——というのが美容師の名前

である——は不安気に、私を信用出来ないと言わんばかりに見つめていた。

9月8日 肘に出来た内出血については、私の右腕が最初は緑色に次いで濃い黄色になった後では、もはや何も目にする事が出来ないと行ってよい。その代わり今日私がジャガ芋の皮を剥きながら窓の外を見ると、私が使っている調理台の感じの良い緑色の合板の上に落ちたジャガ芋の皮に混じって血の染みがひとつ出来てしまった。しばらく時間が経ってようやく私は、たちまち大きくなって行くこの塩っぱい水の原因が自分の左手の親指にある付け根の膨らみに出来た切り傷であることを突き止めた。自分がこのかなり深い切り傷を何とも感じなかったことに私は驚いた。私はその傷をヨード・チンキで処置して包帯をし、ジャガ芋の汚れを洗い落としてしまうと、わざと握り拳で自分の脛を叩いた。脛は少しも痛くなかった。

9月9日 先に説明したような試みの中には、子供っぽくてどんな科学的な価値もないものもある。周知の通り人が全く無意識のうちに常に自分の身体をいたわろうとする結果、叩きつける握り拳の力はもうひとつのそれに劣らず有効な力によって抑えられるか弱められるのである。極端な自己破壊の意志のみが、自分の心臓にナイフを突き刺すようにと人間を駆り立てることが出来るのだ。このような破壊の意志など私の場合は問題外である。私が近頃行なっている限りの取るに足らない試みは、先に挙げた奇妙な諸現象の説明に役立つに過ぎないものである。とはいえ事はそれらの現象に留まらなかったのだけれど。そういうわけで私は昨日くしゃみのひどいむず痒さに注意を促され、鏡の助けを借りて自分の喉の中を見た。風邪の症状の場合にはしばしば既にそうであるように、全ての粘膜が火のように赤かった。激しい炎症を起こしているにもかかわらず、ものをぐくと呑み込むことは私には少しも苦痛ではなかった。柔らかい食べ物の代わりに固いパンの皮や胡桃を食べようとする場合でも、ぐくと呑み込むことをいわば無意識のうちに抑制することを別にすれば、私は何も感じなかった。

9月11日 自分の女友達クララを伴って私は今日ある美術展を訪れた。私達が一緒に絵画を鑑賞するのは初めてのことでなく、いつものように私は大いに骨を折って、クララをいわゆる抽象絵画に親しませた。普段であれば私はこの種のものを説得する場合たちまち疲れ果てるのだけれど、今日はますますお喋りになっ

た。そして私が覚えている限りでは、クララは何度もかなりびっくりして私を横合いから見つめていた。私が古い〈具象 gegenständlich〉芸術を弾劾する時の言い方が少し大袈裟に聞こえたことはあるかも知れない。というのも私が言及したのが、前世紀のいやそれどころか今世紀の一連の絵画（ハンス・トーマの《月光のヴァイオリン弾き Mondscheingeiger》、ベックリーンの《死の島 Toteninsel》、ココシュカの《旋風 Windsbraut》、ファン・ゴッホの《鳥のいる麦畑 Kornfeld mit Raben》）であり、「これらの絵画はあまりにも露骨な手法で、いえそれどころか食欲を失わせんばかりの手法で人間の様々な感情を表現しているわ」と主張したからである。このような過剰な死の悲しみや孤独や狂気からは、抽象絵画の構図は自由である。それらの構図が鑑賞者を無関心にさせておかない限り、鑑賞者の心の中にひたすら呼び起こすのは、人間の存在とは何の関係もない——しかも事物から更に抽象されている——色彩と形に対するある程度非人間的な喜びである。私は今日ほどこの喜びを強く感じたことは一度もない。この喜びがこれほど後々まで私の心の中で影響し続けたことは一度もないのだ。

9月12日 私が自問しているのは、〈昨日クララと一緒に美術展を後にして自分達が公園を歩いて家に帰った時、あたしはどうして自分の身体の調子のことにひと言も触れなかったのかしら〉ということである。そもそも誰かがそのことに関心を抱くとすれば、それは、私が何年も前から知っていて、外面上のあるいは内面上の不快感をこれまで隠し立てしたことの無いクララであったところだ。今日私が昨日と同じ道を通って同じ灰色の噴水盤の傍を通り過ぎる時、私の心に思い浮かんだのは、自分がちょうどその場所で〈思っても見て〉とか〈あんた、こんなことは奇妙だと思わない〉という言葉で実際クララに自分の容態を描写し始めようとしていることだった。私はそのことをしかしあの時はやはりしなかった。どんな異常事態もそれもあの様に明白な異常事態でさえも反感を呼び覚ます、少なくとも何らかの不審の念を呼び起こすことはあるかも知れないし、そうなればその不審の念は互いに親しい人間達の間によそよそしさみたいなものを生み出すのだ。

9月15日 自分の掛かりつけの医師に診てもらいに行く考えもまた私は退けてしまった。医師のところへ人が行くのは、自分にどこか痛いところがある場合である。それ以外ではどんな場合も人は物笑いの種になる

だけであろう。それにもかかわらず私は、もやは痛みを感じないことで近頃不安を覚えているのを否定することが出来ない。その上このように身体上の苦しみを感じられないことは、まるで私が既に長い間、ひょっとするともう数年も前に進んできた道程の一段階に過ぎないかのように私には思われる。〈自分の古い日記類に目を通せば、あたしの疑念は裏付けされるだろう〉と私は殆ど確信している。私はしかしこういったことに没頭したくない。結局のところ私は、自分にはどこも痛いところがないこと、そして涙を流すのが自分にはもはや出来ないことに何の責任もないのだ。

9月16日 私は今日右の上顎の軽い撃るような痛みのために歯科医に診てもらいに行った。歯根膜のひどい化膿が明らかになった。その歯科医は、私が彼の最も痛がる患者のひとりであるので、「どんな麻酔も掛けないで治療して下さい」と私が彼に注文を付けたことに極めて驚いた。歯を引き抜くのが私にとってひとつの実験であり、しかも私が最高に緊張して待ち受ける実験であることが、彼には予想もつかなかったのだ。歯科医のヴィマー博士はとても手際良く仕事をするし、〈先生はあらゆる努力を払って、麻酔の掛かっていない状態でもあたしにどんな衝撃も感じさせないようにしてくれるだろう〉と私には分かっていたので、彼が鉗子を既に当てがっていた時、私は頭を動かした。その結果鉗子は間違った隅っこに食い込む羽目になった。次の瞬間私の身体の中を激しい痛みが貫いた。ヴィマー博士は血塗れの歯根を挟んだ鉗子を高く上げた片手に持ちながら謝った。彼が嘘偽りなく狼狽したのはとりわけ、その時涙が私の両頬を伝って流れるのも目にしたからである。どうして私は彼に、それが喜びの涙であることを説明することが出来たろうか。

10月1日 歯科医の許で自分が味わった体験に私は励まされ元気づけられた。私は何も好き好んで異常なものであったり独りぼっちでいるわけではない。私は一度も結婚したことはないけれど、常に人付き合い良く暮らして、自分の友人達の運命に心の底からの関心を寄せてきた。苦しんでいる大勢の人間達の列に再び組み入れられて、私が初めて感じたのは、伝説の古代の神々を脅かし、その神々が人間の姿となって人間の諸経験をする契機となった孤独であった。先頃私は、〈苦痛のない生存は決して生存ではない〉というひょっとしたら馬鹿げているかも知れない考えさえも思いついた。歯を抜いて以来私が包まれている朗らかな気分は、それ以外には説明出来ないものと言ってよい。そ

の朗らかな気分のお陰で私は昨日ささやかな会を開く気になった。私達は謎々遊びをした、というよりはむしろ人間の特性と態度（盲従、貪欲、嫉妬、死の不安など）を表現して言い当てなければならない一種の言葉当て遊びをした。人々がこのような何と言っても無邪気な遊びを上手に楽しみ、多くの才気と上機嫌がそこに現われる様子に、私は驚いた。その上、選ばれた様々な主題もそれらを明確にする説明の方法もともに人間の本性についての極めて興味深い会話の基となるものであるが、その会話に私は昨晚極めて活発に参加した。私達は——既に朝の三時だった——散会する時、このような集まりを場所を変えてしかし定期的に繰り返し開こうと決めた。仲間はまだ互いに息が合っているのだからこのままにしておこう、目下合衆国を旅行中の私の男友達ヴェルナー・Fだけはなお入会を許そう、ということになった。

10月3日 私が先日言及した日記類というのは実は、私が毎日書き蓄めている一般的な類の考えや印象ではなくて、小さなノート類——その中で私は自分自身について報告することはめったにないのだけれど、でもそうする時には全く情け容赦もない率直さを持って報告している——のことである。私は今日このノート類の最後の方を手にとって数箇所赤鉛筆で線を引いた。そこには私の親戚と知人の範囲内で起こったある種の出来事に対する私の様々な反応が述べられていた。私が赤線を引いた言葉は、「無関心」「冷淡」「印象にない」「同情出来ない」というものである。残念なことに私には近頃再び、これらの言葉に不安を覚えてそれらの言葉を自分の身体の調子と関連づける動機があるのだ。

10月6日 私は今日事務所内で仕事をしている間、舌に強烈な血の味を感じて洗面所に行かなければならなかった。そこで私はその後口一杯のどろりと赤い血を何度か洗面器の中に吐いた。どうやら私はそれと気づかないうちに自分の舌を噛んでしまったらしい。出血はまもなく止まったが、私がほんのしばらくの間はきりと口が利けなかったことは私の同僚達に大きな哄笑を呼び起こした。私の心に思い浮かんだのは、〈あたしは子供の頃たびたび舌を噛んでしまい、あの頃は全く血が流れなかったのに、その都度大きな声で泣き叫んでしまったわ〉ということだった。私は今とても慎重に食事をし、話す時でさえも気をつけている。どうやら私は、危険を冒さないでは口蓋の中を自由に動くことの出来ない異常なほど長い舌をしているようだ。

10月15日 私は最近仕事が多く、そのお陰で自己観察から目を逸らされていた。昨日私はうちの上司（私はある広告代理店で働いている）に呼ばれ、昇給が約束された。クラーマー氏は私が自分の仕事を遂行する際のむらの無さと落ち着きを褒めた。「他の者が皆精神と身体との不調和に意のままにされているのに、君は全く驚嘆に値する釣り合いを見せつけている」と彼は言った。「それに君は自分の同僚達との会話にもだんだん応じなくなった」と彼は大いに褒めた。挙げ句の果てに彼は、私を完全確実に機能する機械に例えることで冗談を言った。この評価はまだ数週間も前でなければ私に不快な印象を与えたところだ。しかし今年の9月16日と10月1日付けの私の手記の中に表現されている感傷的な気紛れはとうの昔に過ぎ去っている。自分が先頃少しの痛みも感じないで片腕を骨折したことによって、私は不安感ではなく恍惚感を覚えた。私はだらりと垂れ下った右腕を左手で支えながら、とある外来診療所に赴いた。そこでは私の願いに応じて骨と骨を釘で留め合わせてくれた。その後私は三五分遅れて自分の仕事場に姿を現わした。医師も事務所長もびっくりしていやそれどころかある種の恐怖の念を抱いて私を見つめた。私は彼等には不気味だったのだ、私が自分の常に変わらぬ親切心によって自分の同僚達にも近頃不気味であるように。

10月20日 私の男友達ヴェルナー・Fは昨日様々な見聞と新たな計画で一杯になって合衆国から戻ってきた。彼は私に沢山のことを、中でもアメリカの教育制度について話してくれた。アメリカの教育制度を研究するのが彼の旅行の目的だった。私の目についたのは、〈彼は何と潑刺として若々しく見えることかしら、それに彼には以前縁遠かった幾つもの事柄、例えば政治に突然何と大きな関心を寄せていることかしら〉ということだった。どうやら彼はある政党に入りたい気がしないでもないらしく、何がしかの教育計画の地均しをするために、大企業のみならずキリスト教会にも手蔓を求めているようだ。私は彼の思考の筋道を辿ろうと骨を折ったけれど、たちまち疲れた。私には以前あれほど共感出来た男友達の活動力の中に私が突然発見したのは、仕事上の性急さと自己顕示欲の傾向だった。それにまた私は彼が投げ掛けた問題から殆ど興味を引き出すことが出来なかった。彼は結局のところ失望して殆ど素っ気なく別れを告げた。私の態度が私達の関係、つまり歳を重ねつつあるふたりの独身者の思いやりある友情を疑わしいものにしたのであれば、私には残念なところだ。私はしかし、耳新しい冗漫な論議を

持ち込んでくる新たな訪問にはただただ耐えかねるのではないかと危惧している。私達が何度かそしてヴェルナーの旅立ち直前になってもなお結婚することを心に抱いていたことは、私には全く馬鹿げているように思われる。

10月27日 かなり著しい昇給のお陰で私は別のもっと広い住居を借りることが出来た。とうとう私も長い間に育んできた望みを適えることが出来たのだ。私は今居間に焚き口の開いた暖炉を持っているし、十分に乾燥したブナの丸太と焚き付け用の薪も揃っている。昼が一層短くなり長くて霧深い冬の夕べが始まるのが、私には待ち切れない。帰宅したらすぐに、私は自分の家の暖炉に火を付け、感じの良い真鍮製の器具（会社からの贈り物である）の助けを借りて炎を調整しよう。炎のチラチラする明滅、ピクピクする揺らめき、パチパチ跳ね上がってはドサッと崩れる音は私を訪れる客達の会話よりも上手に私を楽しませてくれることだろう。来客達からは私はもうしばらく前からもはや何ひとつ得ることが出来ない。そんな時はクララみたいな良い女友達からさえも耳に出来ることと言えば、結局のところいつも同じことである。つまりは手の届かないものへの憧れ、失ったものに対する嘆き、自身の生活や自分にとって大切な存在となっている他人の生活についての不安である。私にとって大切なものはもはや何もないし、自分自身の生活のことも私は心配していない。時折り私が考えるのは、〈どこも痛いところのない人はある意味では不死なのだ〉ということである。

10月29日 私は今日路上でひとりの子供が不安で一杯になって泣き叫んでいるのを耳にした。私は何も外へ駆け出したというわけではなかった。私はあくまでも自分の室内にいて、窓を開けることさえしなかった。私はしかし、子供達の苦しみほど私を大いに興奮させるものは以前にはなかったということを思い出し、一瞬の間自分の無関心さにぎょっとした。まるで完全な冷静さが極めて追求する価値のある目標ではないのか、いやそれどころかひょっとしたら唯一追求する価値のある目標ではないのかというように。

11月10日 私の片腕はとうの昔に治ってしまった。その代わり私は最近再び舌を噛んだことが何度かある。私の注意力のお陰で出血する事態には至らなかったけれど、その場合癒着ないしは肥厚が生じたに違いない。私があることに気づいているのは、私がゆっくりとか

つ明瞭に話しても誰も私の言うことがもはや分からないということからである。魅力のある旅行広告のための十の重要な新提案を含んだ報告を文書で私が提案しなければならなかったのは、自分の上司に私の言うことを分かってもらおうと努力したが無駄に終わってしまった後のことだった。クラーマー氏は私の病気が殆ど滑稽なほど取るに足らないことがどうやら分かっていないらしく、ひょっとすると脳卒中みたいなものさえ憶測しているのか、「家に留まっていなさい」と私に愛想よく勧めてくれた。「君には文書仕事を世話しよう」と彼は約束してくれた。自分の引き出しを片付けている時、私が笑わざるを得なかったのは、自分の同僚達が、つまり胃潰瘍やリュウマチや徐々に大きくなって行く癌腫瘍を抱えたこの哀れな人間達が唯ひとり健康な女性である私を何という同情心を持って眺めているのかということに対してであった。

11月20日 もはや勤めに出なくなって以来、私はようやく本格的に新居に家具を入れて、最後に持ってきたトランク類の中身を取り出すことにもなった。この機会に私は今日自分の古い日記類を全て処分した。目下のところ私に関して起きていることの方が、自分が以前書き留めた全てのことよりも興味深い。私はしかし、過去に由来するある種の報告もまたこの紙面の読者にとって重要であると想像することが出来る。そういうわけで、私が子供の頃どんな機会にも、どんなつまらない機会でも泣いたことや、身体上不快な目（膝をぶつけて怪我をすること、肘をぶつけること、スケートを滑る時凍えること）に遭った時極度に神経質だったことは、読者の興味を惹くかも知れない。更には、私がスターリングラードで戦死した自分の婚約者の死に慰められようもないほど悲嘆に暮れたことも。

11月28日 季節は冬であり、私は相変わらず家にいる。骨折した一本の指のために私が診てもらいに行く羽目になった医師は、「文字通りあなたを綿でくるみます。つまりあなたの四肢の万が一にでも損傷するかも知れない箇所全てに厚い包帯を施すのです」と主張した。もちろん私はこのことに異議を申し立てた、「私は健康です。私の食欲と消化力は抜群ですし、私の気分は上々なんです」。私に約束されていた仕事の委託が案の定来なかったのも、私は退屈しないために、自分がこれまで馴染んでいなかった言語を幾つか習得し始めた。私はこの取り組みに充分成果を挙げている。私が苦しんでいる唯一のことは、絶えず微かな寒気がすることである。私に暖炉とそのための十二分の薪の蓄え

があるのは何と結構なことか。

11月30日 今日ヴァイトマン氏から電話が掛かってきたが、「9月30日にあなたが招待した人々を皆新たな遊びの夕べに掻き集めるのに僕はとうとう上手く行った」という内容だった。「言い出しっぺのあなたには、そして僕は好意の気持ちから請け合うのだけれど、遊びの才能に一番恵まれたあなたにはこの夕べに参加してもらいたいんだ」と彼は主張した。もちろん私は断った。そのような遊びやそれどころか必ずその後が続く決まっている人間の本性についての会話は、もはや私の興味を惹くものではない。おまけにその可能性の数はあまりにも限られていると私には思われる。それは、人間が自己の限りある生涯において、従ってほんの束の間支配されている一握りの特性や妄想くらいなものだ。そんなことをして一晩と夜半の間過ごすのは甲斐のないことだ。

12月2日 昨日自分の身に何が振り掛かったのか、私には分からない。以前は毎日何時間も散歩していたのだから、私が部屋の中にいるのに突然もはや耐えられなくなったことはなるほどまだ理解出来ると思われるかも知れない。私はしかし今回は全く公園や田舎へ出掛けず、町へ行った。そして奇妙なことに私は道すがら、自分が会おうどんな人でも引き止めて根掘り葉掘り聞こうとしたのだ。もちろん傷跡を残したまま癒着した私の舌は私の言いなりにならなかった。それにまた私は習得したばかりの片言の外国語を興奮に包まれて差し挟んだこともあったのかも知れない。いずれにせよ私は厚く包帯をした両手で身振りをして訳の分からぬことを口籠もったので、狂った女という印象を与えたに違いない。警官達が私を結局のところ家に連れ帰ってくれたので、家に着くと私はすぐに落ち着いた。今日私に話してくれたところによれば、自分の全く知らないあの人達に私が抱きつこうともしたそうだけれど、私は自分の振舞いによって自分が貶められたとは感じていない。私が自問しているのはただ、〈あの主婦や公務員や郵便配達人や生徒達から一体あたしは何を聞いたのかしら〉ということである。ひょっとしたら私は、何があの人達のそれぞれの心を目下動かしているのかを聞き出して、自分には縁遠いものとなってしまった様々な感情を自分自身の中に呼び起こしたかったのかも知れない。

12月4日 私は相変わらず全く落ち着いている、いやそれどころか、私には今でも全く理解出来ない病気の

発作が出た以前よりも遙かに平静である。〈あのような発作は繰り返す起らないだろう〉と私は確信している。自分の言うことを他の人間達に分かってもらうことに自分がどうやらもはや上手く行かないようだという事実、私は苦しんではいない。異常な人間達あるいは異常な運命を持つ人間達が理解された試しは稀れに過ぎない。いずれにせよ自分の気持ちを打ち明けることも私にはもはや重要ではないし、他人の気持ちを受け取ることも全く同様重要ではない。私の理解力は素早く正確に働いているけれど、これを試してみるだけの私の興味を惹くものは何もない。私はそのため自分がしていた言語の勉強に見切りを付けてしまった。せいぜいのところ私がなお取り組んでいるのは、自分が通った学校時代の最後の頃にある変わった男性教師がクラス中の馬鹿な女の子達を魅了する種となった幾何学の基本的な概要くらいなものである。私はまだ自分の使った古い教科書類だけでなく垢抜けた飾り付けのある製図用具入れも持っている。黒色と有色の製図用インクを使って私はコンパスと直角定規を極めて正確に操りながら、求める図形を作成する。自分のささやかな所帯を私は相変わらず几帳面過ぎるほどきちんとしているし、書面で注文した食料品から自分の食事も自分で用意している。

それにまた自分の外見に関して、私は決してだらしなくしてはいない。アルフォンス氏がやって来て私の髪を整えてくれるし、ありとあらゆる軟膏を塗って私は注目を集めるに値するほど瑞々しい自分の肌の手入れをしている。〈神々は年を取らないわ〉と私は昨日鏡に映した自分の姿を目の前にして思ったが、もちろん皮膚が籠められていないでもなかった。

12月6日 今日私の誕生日に何度か住居の戸口の呼び鈴が鳴った。私は身動きもしなかったけれど、後で外へ行って敷居の上に置かれていた花々と手紙類を拾い上げた。私の男友達ヴェルナーが一輪の大きなアザリアを贈ってくれ、彼のお祝いの手紙の中で、「僕に電話しておくれ。そして僕と一緒に僕の知っている医学の権威に診てもらいに行ってくおれ」と必死になって私に訴えていた。どうやら彼は私を危篤状態と見做しているようだ。春に蒔かれた花の束は遊び仲間から、アマリリスは事務所の同僚達からのものだった。夕方頃呼び鈴が三度鳴った。この短一長一短の音はクララと私が申し合わせた合図なので、私は全く不本意にも戸口を開けてしまった。私もその時実際クララに会えて嬉しかった。私は彼女を住居中案内して回り、自分達用に食卓の用意をしてチーズ・スフレをひとつ作っ

たが、それは全く飛び抜けて美味しかった。後で私は彼女に自分が描いた幾何の図形を幾つか見せた。彼女は奇妙なほど塞ぎ込んでしまい、立ち去る時には目に涙を浮かべて私を抱き締めた。彼女は彼女で自分の家庭内にどんな心配事と厄介事を抱えているのか、誰が知ろう。私は彼女に尋ねはしなかった。

12月9日 今年の寒さは異常だ。早くも朝から私は灯油暖房と平行して更に暖炉に火を付けなければならない。私はそうした後で低い肘掛椅子に座っており、時間が経つに連れてその椅子をますますぴたりと火の傍にずらして行く。暖炉は空気が良く通って素晴らしく燃え、炎がパチパチ飛び散ってはユラユラと踊っている。そしてこの絶え間ない動きこそが、既に過ぎ去った時に見た寄せては碎ける海の波の光景と同様、私の恍惚状態を引き起こしてくれるのだ。室内がもう暗い時にはたびたび、炎が想像もつかない深淵から迸り出て轟々と唸り声を上げる火山の麓に自分がある思いが私にはする。思わず知らず私は鈍い爆発を伴ったこの精妙な響きを真似ようとする。もう長い間その響きは、ラジオ放送から流れてくる音楽——これはそれにしても常にあまりにも人間的な匂いがするものである——の埋め合わせをしてくれる。火から離れ、横になって寝ようとする、私はとても寒気がする。

12月12日 今寝床の中にもたびたび私の手足全てを震わせる寒気が募ってくることを除いては、変わったことはない。そういうわけで私はつい今しがた、真夜中直前に再び起き上がって、まだ弱々しく燻っている暖炉の火の上にまだ僅かばかり残っているブナの薪を置いた。私は自分の椅子を火の傍にずらして、炎が活気づく様子を目にして満足した。明日ようやく薪が新たに配達されるのを待ち受けているので、私はずっと以前から読まないままになっているけれど背後の本棚にあって都合良く手が届くことの出来る書物の助けを借りなければならぬだろう。私の書き物机の引き出しの中に入っている古い手紙類もまた燃料の役に立つ見込みがある。ひょっとしたら私は今すぐにもこれらの手紙を火の中に投げ入れ始めた方が良いところなのかも知れない。薪はそのシューシューという音が私に訴えている通り、湿っているようだ。古い紙というのはしかしいつも良く燃えるものである。

12月13日 朝方。私は眠り込んで何か悪い夢を見たに違いない。私の顔は塩っぱい湿り気で覆われている。けれども眠り込む前に私が読んだ手紙類の内容に心動

かされて涙を流したということは、殆どあり得ない。この手紙類に何が書かれてあるのか、私には既にもはや分からない。しかしそれが恋文であったことはあり得る。いずれにせよ私は、目を覚ますとすぐに炎を突ついて掻き立て、筆跡で覆われたこれらの紙屑を二、三枚引き出している自分にはっと気づいた。私は出来ることならある言葉をもう一度読みたいのだが。

私はこれ以上もはや書くことが出来ない。半ば燃え尽きた何枚かの便箋を子供っぽく捜しているうちに私は慎重さを欠いていた。ひょっとしたら私の両足に巻いてあるガーゼの包帯にも火が付いたのかも知れない。いずれにせよ私の両脚が膝のところまでブスブスと燃えており、両脚を炎から引っ張り出す力が私にはもはやない。私は少しも痛みを感じないけれど、今しがた恐ろしい叫び声を上げたに違いない。この叫び声に応じて共同住宅の中が賑やかになった。呼び鈴が鳴り、戸口を叩く音がする。今や人々はそれどころか住居の

戸口を叩き壊しつつある。美しい火、愛する火、——大地の深淵から現われた古代の神ウルカヌス (Vulkan) —— が私を炎から引っ張り出してくれる。けれど私はお仕舞いだ。私は不死ではない。私は涙を流し、私の指は一枚の紙切れにしがみつく。その切れ端に書かれてあるのは、愛という言葉なのだ。

[訳者註]

現代ドイツの女流作家マリー・ルイーゼ・カシュニッツ (Marie Luise Kaschnitz: 1901-1974) の両短篇「作家 Der Schriftsteller」と「火に包まれた足 Die Füße im Feuer」(短篇集「長距離電話 Ferngespräche」 Insel Verlag 1966 所収) のテキストは、Marie Luise Kaschnitz: Gesammelte Werke. 7 Bände. Insel Verlag. 1983. 4.Bd: Die Erzählungen 1919-1974. S.489-520. に拠っている。

(受付 1997年10月3日)